【別添１】

18	国立大学法人福井大学教育学部附属義務教育学校	H30～R4

令和４年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

長期的なプロジェクト型学習を義務教育９カ年で発展的に積み重ね、社会に意思をもって生き、自律的な学びができる子供を育てるために必要な資質・能力の研究開発

２　研究の概要

主体的に課題を発見し、協働的に探究を続け、物事の本質を問い続け、省察しながら学び続ける資質・能力を育成する新領域として、「社会創生プロジェクト」を新設した。前期課程（第１～６学年）においては、「社会創生プロジェクト」には欠かせない他者との対話、自己との対話（省察）の資質・能力を高めるため、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」（以下、国語科の２領域）と総合的な学習の時間及び生活科（以下、総合及び生活科）、学級活動の時間を、後期課程（第７～９学年）においては、国語科、学級活動の時間と総合的な学習の時間を包括し、９カ年がつながったプロジェクト型学習のカリキュラムとして「社会創生プロジェクト」と設定した。９カ年を各フェイズ（前期課程第１・２学年を「フェイズⅠ」、第３・４学年を「フェイズⅡ」、第５・６学年を「フェイズⅢ」、後期課程第７～９学年を「フェイズⅣ」とする）の段階に分け、協働探究的に重層的かつ系統的に学びを紡いでいく。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

各教科においてそれぞれの「見方・考え方」をはたらかせて深い学びを実現するとともに、各教科・総合的な学習の時間・特別活動などの枠組みを超えた汎用的に使える資質・能力を高めることで、その互恵性においてその場限りの学びではない自律的で「深い学び」が生まれ、それが一層深く大きな学びへの原動力を生むと考える。そこで「社会創生プロジェクト」を新設し、全ての教科等の関連や活動との連続性を図りながら、探究的かつ発展的、持続的な学習として成立するような幅広の視点をもった学習活動が展開されることで、子供主体の深い学びをつくることができるのではないかと考えた。

（２）教育課程の特例

フェイズⅠ～Ⅲでは、国語科の２領域と総合、生活科および特別活動を編み込んだ「社会創生プロジェクト」とし、９年間及び各フェイズの学びの連続性を明確にする。新設領域の目標･内容に、より実生活に近い形で学習が展開できるよう、該当する国語科の２領域の指導事項を位置付ける。国語科の「読むこと」に関する学習は、従来通り国語科の中で行い、課題探究的に学習を展開する。また、創作的な「書くこと」の学習は、文学的な文章を「読むこと」の学習と関連を図って展開することを考え、国語科として行うことにする。このように国語科の目標、内容を教育課程全体で位置付けているので、転出入の児童・生徒においても、支障がないものと考える。

フェイズⅣにおいては、フェイズⅠ～Ⅲの学びの経験や各教科の「主題－探究－表現」型授業での学びの経験を積み重ね、「発意－構想－構築－遂行・表現－省察」の探究のサイクルを生徒たち自身が回すことができている。また、生徒たちは「社会創生プロジェクト」を軸にして学びのつながりを自然に紡ぎ、すべての教科・領域において効率的かつ効果的に学習を繰り上げることができていると考えられる。そこで、国語科や特別活動の一部と、総合的な学習の時間を「社会創生プロジェクト」として編み込んでいく。

（３）研究成果の評価方法

①取組に関する評価

◆公開研究会等の開催回数

◆教育機関等での発信回数

②成果に関する評価

◆各種学力調査による評価

◆研究会参加者による評価

③満足度に関する評価

◆児童・生徒、保護者、教師の三者へのアンケート調査による評価

◆児童・生徒のポートフォリオによる評価

◆教員による実践レポート

４　研究内容

（１）教育課程の内容

各教科等の授業時数の増減については教育課程表に記す。

国語科については、国語科の２領域（創作的な「書くこと」の学習は除く）の全ての配当時間数を「社会創生プロジェクト」に組み入れるのではなく、国語科の２領域の指導事項を指導する際、取り上げる言語活動を鑑み、「社会創生プロジェクト」の活動を展開する上で必要と考えられる授業時数を示した。また、前期課程においては２年間（フェイズ）を１つのサイクルと捉え、国語科の２領域について、新たな学びを展開するだけではなく、スパイラル的な学び（一度行ったことを検討して再度行う）も展開していく。スパイラル的に学ぶことで、言語活動を通して指導する指導事項を子供自らが認識し、身に付けることが期待できる。これからの社会に必要な力を培っていくためには、教科書のコンテンツに沿った学習を展開しているだけでは、決して実践することができないであろう。各フェイズの探究サイクルを系統的に編み込む学びの連続性、４つのフェイズが相関関係を築く学びの連動性を捉え直し、９年間の有機的な学びを紡いでいきたい。

（２）研究の経過

第１年次	**【プロジェクトの展開】** ◇**「社会創生プロジェクト」**の方向性を探り、１・２年、３・４年、５・６年で、プロジェクト型学習を試案する。 ◇福大附属版子供ラウンドテーブル（フェイズ３・４）の開催。
第２年次	**【プロジェクトの省察と再構築】** ◇第１年次を基に、１・３・５・７・９年生は研究集会で実践発表（ポスターセッションなど）を行い、２・４・６・８年生はテーマについて省察・再構築する。 ◇福大附属版子供ラウンドテーブル（フェイズ２・３・４）の開催。
第３年次	**【プロジェクトの構築】** ◇２ヵ年の実践を基に、１・３・５・７・９年生は研究集会で実践発表（ポスターセッションなど）を行い、２・４・６・８年生はテーマについて省察・再構築。 ◇２・４・６・８・９年生は2019年度までの実践の成果を福井大学夏季ラウンドテーブル（６月）で、１・３・５・７年生は2021年度の実践の成果を福井大学春季ラウンドテーブル（２月）で発表。 ◇５・６年の「社会創生プロジェクト」と７～９年生の「社会創生プロジェクト」を有機的につなぐ。 ◇福大附属版子供ラウンドテーブル（フェイズ１・２・３・４）の開催。
第４年次	**【福大附属版キー・コンピテンシーの提案】** ◇１～９年生までのプロジェクト型学習を見通し、「福大附属版キー・コンピテンシー」として発信。

（３）評価に関する取組

第１年次 （2018）	◇児童・生徒、保護者、教職員、研究会参加者を対象とするアンケートにより評価を行う。 ◇年１回報告書を作成し、発信する場（福井大学ラウンドテーブル・研究集会）を生かして、検討・見直しを行う。
第２年次 （2019）	◇児童・生徒、保護者、教職員、研究会参加者を対象とするアンケートにより評価を行う。 ◇年１回報告書を作成し、発信する場（福井大学ラウンドテーブル・研究集会）を生かして、検討・見直しを行う。
2020	◇９ヵ年における福大附属版キー・コンピテンシー2.0の系統表を作成する。 ◇他校との研究交流や運営指導委員の助言を受け、検討・見直しを行う。
第３年次 （2021）	◇福井大学ラウンドテーブルなど、作成した報告書をもとに年１回発信し、参加者からの評価を受けて、検討・見直しを行う。 ◇研究集会等で保護者や卒業生の評価を得て、検討・見直しを行う。
第４年次 （2022）	◇福井大学ラウンドテーブルなど、作成した報告書をもとに年１回発信し、参加者からの評価を受けて、検討・見直しを行う。 ◇県内・全国に「福大附属版キー・コンピテンシー」として発信する。

５　研究開発の成果

（１）児童・生徒への効果

①フェイズⅠ（前期課程第１・２学年）の効果

第１学年では、幼稚園からの学びが接続し、さらには年度当初に好きな遊びをする時間を１週間設けることが、その後第１学年の児童の力で「発意－構想－構築－遂行・表現－省察」の学びのサイクルをまわすための原動力となった。

第２学年では、昨年度に引き続き発信の対象が下学年であったことは、「１年生を笑顔にしたい」という「学びへの意欲」が持続され、「発意－構想－構築－遂行・表現－省察」の学びのサイクルで学ぶことのよさや有用性を実感することができた。

②フェイズⅡ（前期課程第３・４学年）の効果

第３学年では、身近な公園を通して、公園を守っている団体と結び付き、継続的に関わることによって思いをもって活動の方向性を見定めながら探究活動を進めることができた。

第４学年においても、３年生次の活動が発展し、公民館の自主サークルを通して創作体操を地域に広めることができ、テーマに迫る思考が深まり、さらなる活動の発展につなげることができた。

③フェイズⅢ（前期課程第５・６学年）の効果

第５・６学年においても、外部講師を招き、継続的に関わり合うことによってコミュニティを形成し、各学年のテーマに迫る活動ができた。また、社会創生プロジェクト実行委員が、毎日のようにミーティングを重ねて、児童たちが活動を引っ張る場面が多くみられた。

④フェイズⅣ（後期課程第７～９学年）の効果

プロジェクトを推進していくためには、常に合意形成力、課題設定力、発想力、構想力、粘り強く挑戦する力、多様な表現方法によって発信する力、自己省察能力が問われる。また、これらの活動を協働探究することで、生徒たちは必要感をもちながら自然とそれら資質・能力を培っていく。第７学年では、探究テーマをはじめとする「主題」を設定するときには、

国語科の学びで得た「主題」設定の方法を生徒自らが転移させていく姿が見られた。第８学年では、視点を学校外に向けて独りよがりではない学びを構築していこうとする姿が見て取られた。さらに、第９学年では、授業、学校行事などのすべての教育活動につながりや意義があるのだと捉えることができた。自分自身の社会における生き方あり方を考えていく姿が見られた。

これら生徒たちの姿から、「自ら考え、行動し、柔軟に調整する力」や「対話を通じて、他者と共に納得解を生み出す力」「社会の一員としてよりよい未来を創ろうとする力」を身に付けて、「社会を創る自己の確立」にむけて成長しているのだと認識している。

⑤学校アンケート結果（令和４年 11 月現在）

平成 29 年４月に福井大学教育学部附属義務教育学校が開校し、旧附属小学校と旧中学校が一つになった。学校児童・生徒アンケート内容について、平成 30 年度は項目が統一されていなかったが、令和元年度より前期課程（小学校）と後期課程（中学校）のあり方・項目を見直し、統一する方向で進めた。令和４年度はこれまで５月、10 月の年２回アンケートを実施し、以下の結果になった。本自己評価書では結果のみを掲載し、考察・反省等については実施報告書にて報告する予定である。

平成 30 年度からの研究により、子供たちは社会創生プロジェクトにおいて、話し合い活動を繰り上げていくことに価値を感じている。様々な学習活動においても積極的に話し合いを行う。また、自身の思いを書き表すことにも慣れ親しんでいる。そのため、６学年の全国学力調査においても全国平均を上回る結果となっている。しかし、国語科の学習で型をしっかり練習しないため、その場に応じた言葉の使いまわしや、ファシリテート力に関しては、子供の文脈に合わせてスキルを身に付ける機会を教師が仕組まないといけない現状が生じている。

	前期課程　アンケート項目	前期課程 5 月	前期課程 11 月	後期課程　アンケート項目	後期課程 5 月	後期課程 11 月
1	社会創生プロジェクトの学習は好きだ。	90%	86%	社会創生プロジェクトの学習は好きだ。	81%	79%
2	社会創生プロジェクトの時間では、友達とかかわりながら、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた。	91%	88%	社会創生プロジェクトの時間では、友だちとかかわり合いながら、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた。	92%	89%
3	社会創生プロジェクトの時間を通じて、地域や社会をよくすることに興味をもち、何をするべきかを考えることがある。	88%	87%	社会創生プロジェクトの時間を通して、地域や社会をよくすることに興味を持ち、何をするべきか考えたことがある。	81%	84%
4	社会創生プロジェクトの時間では、問いや疑問の解明に向け、主体的に取り組んでいる。	88%	85%	社会創生プロジェクトの学習の時間では、テーマの解明に、向けて、主体的に深く追究して取り組んでいる。	84%	84%
5	社会創生プロジェクトの時間を通して、自分が何を学んだかをふり返り、そのよさを感じている。	86%	87%	社会創生プロジェクトの時間を通して、自分が何を学んだかをふり返り、その意義を感じている。	86%	83%
6	社会創生プロジェクトの時間に、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いを付けたりして話し合い、意見をまとめている。	84%	79%	社会創生プロジェクトの時間に自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている。	83%	87%
7	社会創生プロジェクトの時間では、自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	83%	83%	社会創生プロジェクトの時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいる。	85%	85%

（２）教師への効果

月に一度の「社会創生プロジェクト研究会」を実施し、各フェイズの振り返り、現状把握、今後の展望についてフェイズを超えて共有し合った。このことにより、全職員同士の対話が生まれ、「社会創生プロジェクト」で培われる資質・能力について９カ年の見通しをもつこ

とができるようになってきた。また、本校の職員室の座席は月に一度、各フェイズが交じるような配置で席替えをしたり、フリーアドレスのように自由に使用できる席があったりする。そのことで、日常において、固定のメンバーだけでなく様々な職員との対話が生まれ、「社会創生プロジェクト」について多様な考えに触れることができた。このように、月に一度の研究会、職員室の座席というハード面でフェイズを超えた職員同士の対話を生むしかけを仕組むことで、職員一丸となって「社会創生プロジェクト」の研究を行う意識が醸成されていった。そして、９カ年を通した「社会創生プロジェクト」の一連のストーリーを共有することにつながっていった。このことが、教師への効果として挙げられる第１点目である。

第２点目は、教師に「コミュニティを創る力の醸成」という視点で、子供たちの活動を見取れるようになり、さらには教師にコミュニティを創る力が培われてきたことである。「社会創生プロジェクト」を進める子供たちは、プロジェクトに積極的に参加しようとしない仲間をどう巻き込めばよいのかという課題に必ずつき当たる。その課題解決の過程で、教師が介入し、子供と一緒にその課題を解決しようとすることで、教師自身に子供たちのコミュニティを創る力を見取れるようになっていった。また、「社会創生プロジェクト」の研究を進めるに当たって、職員一丸となって協働しながら取り組むことは必須事項である。つまり、これも「社会創生プロジェクト」の研究を進める１つのコミュニティと捉えることができる。それに全職員が関わっていけるようなものにするためには、どのようにしていくとよいかについて考え、行動する力が職員に培われつつある。

第３点目は、フェイズ内はもちろんのこと、フェイズとフェイズの間の学びの文脈をつなげることを意識するようになったことである。どうしても、子供たちの学年が変わったり担任が変わったりすると子供の学びの文脈が途切れがちになる。しかし、新しい学年でも、新しい担任でも「社会創生プロジェクト」の学びを丁寧に接続することで、子供たちの９カ年の取組にストーリー性が出てくる。そのため、教師は対話を重ねよう、各学年、各フェイズの取組を丁寧にとらえようとする意識が育まれていった。

最後に、教師の子供の見取りをナラティブにしるした実践記録の作成により、子供の学びを通して培われた資質・能力を深く見取れるようになった。この実践記録は長期にわたる子供の発言や姿を記録し、どう成長していったかを物語風にまとめたものである。この丁寧な記録、さらにはそれを教職員同士で読み合い、子供の見取りを広げ、また自身に戻して、見取りを深くし、子供に培われた資質・能力について評価できた。また、この作成を通して、どうしても日常の多忙さから現在の子供の姿しか見取れない中、いったん立ち止まり、過去の子供の姿を繋ぎ合わせ、目指す子供の姿を思い浮かべることにも寄与できた。

（３）保護者等への効果

保護者に対する学校評価アンケートを１月に予定している。今後、年度を追ってアンケート結果を積み上げ、効果として報告する計画である。

公開授業や学校だよりなどの機会をとらえて、これまでのプロジェクトの歩みを保護者にも見てもらうことで、子供たちの学びやプロジェクトの方向性について理解してもらうことができた。「社会創生プロジェクト」の授業参観を授業参画という形で保護者に開くことで、保護者が児童生徒のプロジェクトに関わり、家庭でプロジェクトについて話し合う機会が増え、児童生徒の成長を実感できるという声が聞かれた。しかし、その一方「テーマに対する解を子供だけに委ねるのではなく、教師がある程度もっており導いていく必要がある」というご意見もあり、教師のあり方について再度考える機会を与えていただいた。

６　実施上の問題点と今後の課題

第１点目は、見えない資質･能力をどう評価するかである。本研究では子供の観察から始め、省察物を多数の教師で見合い評価してきた。この評価はどうしても子供や教師の主観が入る。

しかし、その主観が常に見直され、再評価し続けていくことが真の評価につながるのかもしれない。その際、教師の長期にわたる実践記録を教職員同士で見合い、語り合うような協働的な教職員のコミュニティを創りだすことが必要になるだろう。

第２点目は、９カ年の協働探究を終えた後、高校へ進学し、社会人となっていく。そこで新たな仲間と探究を進めたり、個人探究を進めたりしていく際に、社会創生プロジェクトでの学び、培った資質・能力はどのように変容していくのか調査をする必要がある。このことで、社会を生きる上で真に必要な教育課程であったかを問えるのではないかと考える。

【別添１】－別紙１

福井大学教育学部附属義務教育学校　教育課程表

（令和４年度）

	各教科の授業時数										外国語活動	道徳	総合的な学習の時間	特別活動	社会創生プロジェクト	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第１学年	**271** (-35)		136		**0** (-102)	68	68		102		17	34		**0** (-34)	**171** (+171)	**867**
第２学年	**280** (-35)		175		**0** (-105)	70	70		105		17	35		**0** (-35)	**175** (+175)	**927**
第３学年	**210** (-35)	70	175	90		60	60		105		35	35	**0** (-70)	**0** (-35)	**140** (+140)	**980**
第４学年	**210** (-35)	90	175	105		60	60		105		35	35	**0** (-70)	**0** (-35)	**140** (+140)	**1015**
第５学年	**140** (-35)	100	175	105		50	50	60	90	70		35	**0** (-70)	**0** (-35)	**140** (+140)	**1015**
第６学年	**140** (-35)	105	175	105		50	50	55	90	70		35	**0** (-70)	**0** (-35)	**140** (+140)	**101**
計	**1251** (-210)	365	1011	405	**0** (-207)	358	358	115	597	140	104	209	**0** (-280)	**0** (-209)	**906** (+906)	**5819**

	各教科の授業時数											道徳	総合的な学習の時間	特別活動	社会創生プロジェクト	総授業時数
	国語	社会	数学	理科		音楽	美術	技術・家庭	保健体育	外国語						
第７学年	**120** (-20)	105	140	105		45	45	70	105	140		35	**0** (-50)	**0** (-35)	**105** (+105)	**1015**
第８学年	**130** (-10)	105	105	140		35	35	70	105	140		35	**0** (-70)	**10** (-25)	**105** (+105)	**1015**
第９学年	**95** (-10)	140	140	140		35	35	35	105	140		35	**0** (-70)	**10** (-25)	**105** (+105)	**1015**
計	**345** (-40)	350	385	385		115	115	175	315	420		105	**0** (-190)	**20** (-85)	**315** (+315)	**3045**

※授業時数、単位数の増減等については、ゴシック体で示す。（　）が教育課程の基準との対比による増減数（見込みの時数のため、実践を展開する中で多少の増減が生じてくることが予想される）。

学校等の概要

１　学校名、校長名

福井大学教育学部附属義務教育学校　　牧田　秀昭

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

〒910－ 0015

福井市二の宮 4 丁目 45 番 1 号

前期課程：TEL　0776－ 22－ 6891　　FAX　0776－ 22－ 7580

後期課程：TEL　0776－ 22－ 6985　　FAX　0776－ 22－ 6703

３　課程・学年別児童・生徒数、学級数

（前期課程）

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
68	2	69	2	67	2	69	2	60	2	67	2	400	12

（後期課程）

第７学年		第８学年		第９学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
107	3	104	3	108	3	319	9

（高等学校の場合）

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	2	2	2	0	29	0	2	0	1	14
ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	2	1	0	58						

５　研究歴

文部科学省関係

平成 30～令和４年度　文部科学省研究開発学校指定